

# 倪元璐の書風変遷―造形性の特徴から―

湯 浅 圭 祐

## 【目次】

### 序章

第一節 研究動機・目的

第二節 先行研究

### 第一章 造形性から観る特徴

第一節 単体の字形における考察

A 長い脚

B シンニョウ(禿)の特異性

第二節 連続における考察

A 形連

B 意連

### 第二章 書風変遷

第一節 第一期 一六二二年以前

第二節 第二期 一六二二年―一六四〇年

第三節 第三期 一六四一年以降

### 第三章 倪元璐の書から派生する観点

第一節 空間とリズム

### 終章

結論

主要参考文献

資料

## 序章

本稿は、明末ロマン派と言われる中核を為す董其昌を中心に、目覚ましい活躍を見せた一人、倪元璐を取り上げる。彼は明朝が滅亡に瀕した国家の絶望的な悲痛を食い入るような真率な態度が窺える人間である。康有為「広芸舟双楫」に「倪鴻宝、新理異態、尤も多し。其の筆法の奇矯亦た観るべし」とある造形性が不明確のまま卒業論文を終え、その更なる追究が不可欠である。造形性の視点から、その特徴を実験的に検討・分析・再考し、学書過程を明らかにすることで、今後の研究の足掛かりとしたい。

## 第一章

吉川蕉仙編『倪元璐の書法』の書幅を対象とした。第一節では、単体の字形における考察をした。

A 長い脚

全部で一二六例見られ、その中でも最も使用された文字は、「中」の十例で、次いで「佛」、「聲」が各六例ずつ確認できる。また、全七十二点の書幅作品中、五十八点の作品で長い脚の使用を確認でき、約八十一%と非常に高い割合で使用されている。さらに、吉川蕉仙による三つの区分での割合は、区分Ⅰが約七十九%、区分Ⅱは八十%、区分Ⅲでは約八十二%であり、どの区分においても、八割前後の高い割合で長い脚を使用する。倪元璐書法の造形における特徴の一つであることが証拠付けられた。

B シンニョウ(禿)の特異性

字例は二十四字あり、「道」が最多の八例、次いで「遠」は五例、「迷」、「通」、「逢」、「遭」が各三例ずつ見られる。また、使用されているニョウ(禿)は合わせて四十九例存在し、「退」、「造」、「遁」、「遭」、「遵」、「邊」の七例は行書で書かれ、行書のシンニョウ(禿)の割合はわずか十二%に過ぎない。

第二節では、連綿における考察をした。

#### A 形連

八十八例確認ができ、そのうち、二字連綿が八十二例（約九十三％）、三字連綿が六例（約七％）であった。区分ⅡとⅢでは、区分Ⅰと比較すると使用頻度が高くなっている。

#### B 意連

明代の書家は「書」に対する「姿態」に専念し、それを尚んだ。意連は一六五例と形連の二倍の例があった。倪元璐は「姿態」だけを尚んだとは考え難く、宋代の「意」を尚ぶことに影響されていると考える。

AとBに区分して考察したが、倪元璐はその区分を気にせず、墨がなくなると墨をつけ、連続できるところは意識をつなげたのではないかという考えに至った。難しいことは考えず、自然に筆が動くままに書いたのである。

### 第二章

蘇軾を学び、顔真卿に入った過程が、倪元璐の学書である。第二期の前半には、それらをすでに確かなものとし、基礎となるものを構築していた。そして、周りからの刺激を受け、誰にも手が届かない独自の境地と書風を切り拓いたのである。故に「新理異態」と称されるのである。

### 第三章

リズムは生命と言い換えられる。書く文字にも生命力が宿っている。書く側の生命力と文字の持つ生命力が響きあって、気韻が生まれる。気韻というのは常に見出せる可能性を持っている。

倪元璐の書を通して、書の表現は「空間」にあると悟った。「空間」は「余白」と言い換えることも可能である。墨を付けた筆を真つ新な紙の上に落した瞬間、墨の「黒」と余白の「白」が相互に響き合い、生命の宿った世界を形成

するのである。書は書かれた文字が主体で、余白が客体である。しかし、その逆を言うことも可能だと考える。文字自体に生命が宿るのであれば、それと響き合う余白にも生命が宿る。人間が書いたものすべてに、生命が生じる。まさに生き物なのである。

### 終章

倪元璐は蘇軾から入り、顔真卿を学び、それを基盤に倪元璐独自の書風を開拓したのである。作品を通観すれば、学書の両者の風格が見え隠れしている。それは、空間の作り方や処理方法は蘇軾の影響が長期にわたり、顔真卿の影響は、線の内側に秘めた強さにあると考える。

「二王以外に別の道を切り拓いた」と沙孟海は述べるが、倪元璐もまた伝統書の学習をした上に、「二王以外に別の道」が存在するのである。

また、倪元璐の書は、その時の生命を刻々と刻み付けるもので、「絶命の書」、「生命を削った書」といった言葉で言い表せる。明末の誰よりも肝が据わり、威風堂々とした態度である。倪元璐は家族の生活ではなく、明王朝（崇禎帝）に対する忠誠を最後まで全うした人物である。残された家族は、悲痛な思いであったであろう。まさに忠義を貫いた生き方である。明朝が滅亡するかしないかの瀬戸際で「一生懸命」であった。このように考えると、倪書は「一生懸命の書」とも言える。ここで、あえて「一所懸命」を使用しなかったのは、「一所」であると、一つの場所、すなわち政治的立場や官職を守ることに命を懸けるという意味と考えたからである。このような様な事ではなく、「一生」の命を懸けて、明朝に仕えたと考える。その際、政治的立場や官職の欲などは一切ない。倪元璐の最大の魅力である。

## 【作品研究 創作】「高青邱 送王孝廉游京回錢塘」

《釈文》

客游南北再逢春 幾驛煙花一騎塵 觀國舊逢朝闕使 還家今作渡江人  
雪迎酒氣消應早 柳逐歌聲發更新 此日腰間垂赤組 不須猶愧故鄉親

《法量》

三〇〇・〇×一八〇・〇センチ 一幅

《解説》

「強さ」は、文字の骨格（結体）と線のことを指す。日本では、書は線芸術だと言われるが、それは強い骨格（結体）が存在してこそ成立する。直筆藏鋒を心掛け、潤筆と渴筆の異なった強さを追求した。

「冴えた線」は、①の線の強さと共通点があるように思う。実際の所、「冴えた線」とはどういう線なのか明確な答えではないが、書くにつれて、「澄んだ」線や「爽やかな」線といった言葉が適当だと考える。蘇東坡の言葉で「非人磨墨、墨磨人」（人墨を磨すにあらざるも、墨、人を磨す）とあるように、書を通して人間性の向上を図りたい。

「気分の一貫性」は、最後に作品を決める時の最も重要な要素である。これは、自然な運筆と気脈が大きく左右する。気分が一貫して脈々と通ると、気に満ちた書になるのである。多くの人を魅了する作を仕上げたい一心で取り組んだ。

また、本作品に押印した印は、白文「湯圭祐」、朱文「光峰」（各三・四×三・四センチ）である。この二類は、後輩の滑田一輝君に依頼し、快く引き受けてくれたものである。本当に心から感謝したい。

## 【作品研究 臨書】「倪元璐 文心雕龍 神思篇一節」

《釈文》

神居胸臆 而志氣統其關鍵 物沿耳目 而辭令管其樞機 樞機方通 則物無隱貌 關鍵將塞 則神有遯心

《法量》

二三五・〇×五三・〇センチ 一紙

《解説》

この倪元璐の作は京都国立博物館蔵であり、条幅形式に揮毫されたものが裁断され、折本に貼り込まれた状態で、現存している。墨が裏まで透るものではなく、上滑りするような紙本に書かれた作であろう。墨量が多いところは濃く、少ないところは薄くなることで、墨の濃淡が鮮やかに表現され、立体的に見える作となっている。その裁断されたものを条幅形式に復元したものが「倪元璐の書法」（吉川蕉仙編、二玄社、二〇一一年）に掲載されている。これをもとに、実験的に八尺×二尺の寸法で復元することを目的とした。

臨書の意義を常に考えて書いた。形臨を心掛けたが、倪元璐の書の造形性的特徴に向き合い、彼の持ち味を最大限に表現した。書において、古典の臨書は最大の学習方法である。その古典の良さを語るには、やはり実際にその書を臨書しなければならぬと改めて痛感した。そして、自身の書を見つめ直すことができ、その古典から新たな書へ発展をもたらすものであり、これからの書の可能性を大いに秘めている。創作と臨書の双方をバランスよく行い、古典に立脚した作品を制作していきたい。そして、倪元璐のような生き様は到底できないが、倪書のような人間味溢れる作を作りたい。この臨書を通して、古典の重要性を実体験する良い機会になった。

〔創作〕 高青邱 送王孝廉游京回錢塘

春將南北再逢春，先驛白  
花一騎。蕃觀國蕃達如關  
使墨家今作渡江人，雲  
酒年消盡，早柳逐引聲  
黃更新山日，隱下垂未組  
不須猶愧故鄉親

高青邱詩  
文心雕龍

〔臨模〕 倪元璐 文心雕龍 神思篇一節

神居身胞乃志，志統中，其鍵物沿平，且為  
令長，其振標，方通界物，其隱歎，其鍵物  
神為好，心文心雕龍神思篇一節文心雕龍